【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	茨　城　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	水海道市立水海道小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	3	3	3	3	3	3	２２	２９
児童数	120	100	119	98	95	91	14	637	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題（テーマ）

学びの機会を充実し，個に応じて一人一人の力を伸ばす指導の在り方
―基礎・基本の定着を図り，確かな学力の向上を目指した授業づくりを通して―

２．研究の内容と方法

(1) 実施学年・教科（選択した理由）

○全学年・算数科（ＴＴ，少人数指導，教科担任制）※非常勤講師は市で採用
第６学年：教科担任と非常勤講師による常時ＴＴ
第５学年：学級担任と非常勤講師による常時ＴＴ
第４学年：学級担任と非常勤講師による一部ＴＴ
第３学年：学級担任と少人数加配（１名）による常時ＴＴ
第２学年：学級担任と非常勤講師または少人数加配による一部ＴＴ
第１学年：学級担任と他学年の空き授業者による一部ＴＴ
各種テストの結果分析から，「自分で考えよりよく問題を解決したり，自分を表現したりするなどの力」が十分にはぐぐまれていない現状がみられること。また，児童の理解の状況に差が出やすい教科であることから実施している。

○高学年・理科（教科担任制，ＴＴ）
第５・６学年：教科担任，一部学級担任とのＴＴ
十分な知識や技能など専門性が強く要求され専門性を生かしたきめ細かな指導が十分に可能な教科であるという教科の特性面から，また教科担任と児童とが人間関係を構築するという面から，高学年での実施が望ましいと考え実施している。

○低中学年・国語（ＴＴ）
第２・３・４学年：学級担任と非常勤講師による一部ＴＴ
「ことば」や「漢字」，文章の読み書きなど，児童の理解の状況に差が出やすいことから，中学年を中心にＴＴを実施している。

○「まなびのじかん」（45分間）・裁量
第３～６学年：全職員によるＴＴ
基礎的・基本的な内容の確実な定着が図れるよう，教科学習の補充的・発展的な学習の時間として設定している。

○朝の自習
全学年で実施（15分間）：全職員によるＴＴ
基礎的・基本的な内容の確実な定着が図れるよう，曜日ごとに「読書」「漢字練習」「計算練習」を位置付け実施している。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	○　テーマ 学びの機会を充実し，一人一人の個性に応じて力を伸ばす指導の在り方 ―基礎・基本の定着を図り，確かな学力の向上を目指した授業づくりを通して― ○　仮説 (1)　個に応じた様々な学びの場や内容の充実を図ることで，児童一人一人の学びの習慣をはぐくめば，自ら進んで学ぼうとする意欲を高めることができるであろう。 (2)　教科担任制やＴＴ（少人数指導)など，個に応じた様々な指導法による授業を通して，よりよく課題を解決しようとする能力などを高めれば，「確かな学力」を身に付けた児童をはぐくむことができるであろう。 ○　研究内容・方法 (1) 本校のとらえる学力観 「確かな学力」を持った児童を育成するために，本校では学力を「基本的な生活能力を基盤に，学校教育において教科，道徳・特別活動及び『総合的な学習の時間』の螺旋的な相互性によって培われる総合的な力」ととらえた。 (2) 個を伸ばす学習指導体制の工夫と改善‥‥学びの機会の充実 ①　ＴＴ指導・少人数指導・教科担任制の導入 ②　異学年へのＴＴと特担及び国際担当による該当児童学級へのＴＴ ③　補充的・発展的学習の充実を図るための「まなびのじかん」の設定 ④　「基礎・基本の時間」としての「朝の自習」の設定 ⑤　機能的な研究組織の充実 (3) 個を伸ばす学習指導方法の工夫と改善･･･個に応じて力を伸ばす指導 ①　基礎的・基本的内容のとらえと共通理解・共通実践 ②　一人一人の考えを尊重したきめ細かな学習の展開 ③　学びの習慣づくりのための，板書・課題提示・ﾉｰﾄの使い方等の共通理解 ④　つまずきを見つけるための各種テストの活用 ⑤　教育機器の積極的・効果的な活用 ⑥　多様な見方・考え方を深める話合い活動の充実 ⑦　指導と評価の一体化を目指した授業実践

平成15年度	○　テーマ（平成14年度のテーマを一部変更） 学びの機会を充実し，個に応じて一人一人の力を伸ばす指導の在り方 ―基礎・基本の定着を図り，確かな学力の向上を目指した授業づくりを通して― ○　仮説（平成14年度の仮説を一部変更及び追加） (1) 教育課程編成の工夫や学習環境の工夫など，個に応じた様々な学びの機会の充実を図れば，児童一人一人の学びの習慣をはぐくみ，自ら進んで学ぼうとする意欲を高めることができるであろう。 (2) ＴＴ（少人数指導）や教科担任制など，個に応じた様々な指導法による授業を通して，よりよく課題を解決しようとする資質や能力など総合的な力を高めれば，「確かな学力」を身に付けた児童をはぐくむことができるであろう。 (3)　様々な学びの場における児童一人一人に応じたきめ細かな指導のための教材と評価の在り方を工夫すれば，課題解決の意欲が高まり児童の「確かな学力」をより充実させることができるであろう。 ○　研究の内容・方法 (1) 基本的な考え　※平成14年度の実践を基に以下のようにとらえた。 ①　本校のとらえる学力観（平成14年度に同じ） ②　学びの機会とは 一人一人に「確かな学力」の向上を図るうえでの基盤となるものであり生涯にわたって学習しようとする資質や能力をより深めるものであると考え，「学びの機会」を図１のようにとらえた。

平成15年度

③　ＴＴ，少人数指導とは

ＴＴとは「複数の指導者がチームを組み，ある集団に対して指導していく方法」であり，少人数指導とは「学級集団を解体して集団別に指導していく方法」である，と考えられている。しかし，これまでの実践から両者は，図２に示したように包含関係にあるととらえた。

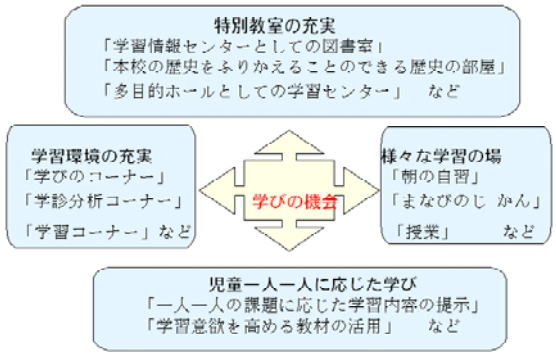


図１　学びの機会について

④　教科担任制とは

教科担任と児童との人間関係の面から，十分な知識や技能など専門性が強く要求され専門性を生かしたきめ細かな指導が十分に可能な教科など教科の特性面から，高学年での実施が望ましいと考え，図３のようにとらえた。

図２　ＴＴと少人数指導の関係について

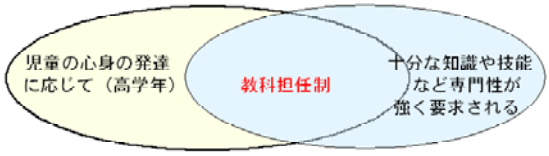


図３　教科担任制について

(2) 具体的な手だてと実際（主な内容）

①　学習指導体制の工夫と改善

・ＴＴ・少人数指導・教科担任制の導入

・ＴＴ学習形態及び指導形態の工夫（図４）

・「まなびのじかん」「朝の自習」の設定

・学習環境（学びのコーナーなど）の充実

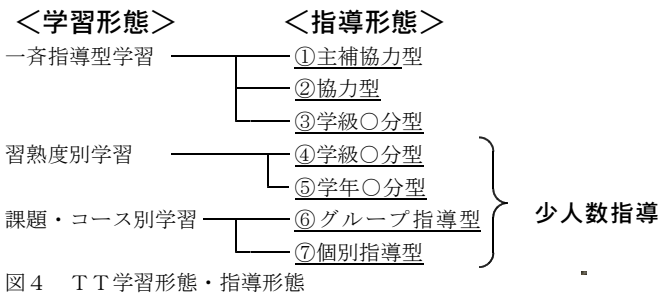


図４　ＴＴ学習形態・指導形態

②　学習指導方法の工夫

・分かる授業の展開と問題解決的な学習の充実

・学びの習慣の育成（板書・課題提示の仕方やノートの使い方等の共通実践）

・つまずきの確認（個人カルテの活用：図５）

・ヒントカード等の工夫

5　年							
学期	単元名	指　導　内　容	テスト番号	合格までの回数			
				1	2	3	4
一学期	1 小数	・() の中の単位（m，km）での表現	1				
		・ある数の 10 倍,100 倍，10 分の 1，100 分の 1 を求める。					
		・数の大小の理解					
	2 分数	・分数のたし算，ひき算					
		・分数の大小，大きさの等しい分数の理解					
	3 四角形	・垂直や平行な直線の理解と作図	2				
		・台形，平行四辺形，ひし形の理解と作図					
		・四角形の対角線の性質の理解					
	4 小数	・小数×整数の計算	3				

図５　算数科「個票（個人カルテ）」（５年の例）

③　評価方法の工夫と改善

・評価規準の工夫と活用（より「広く」「深く」「高く」の観点から，さらに発展的な内容を見据えての評価）

・自己評価カードの工夫と活用（個人内評価の活用）

④　学習教材の開発

・興味関心が高まるような導入時の教材

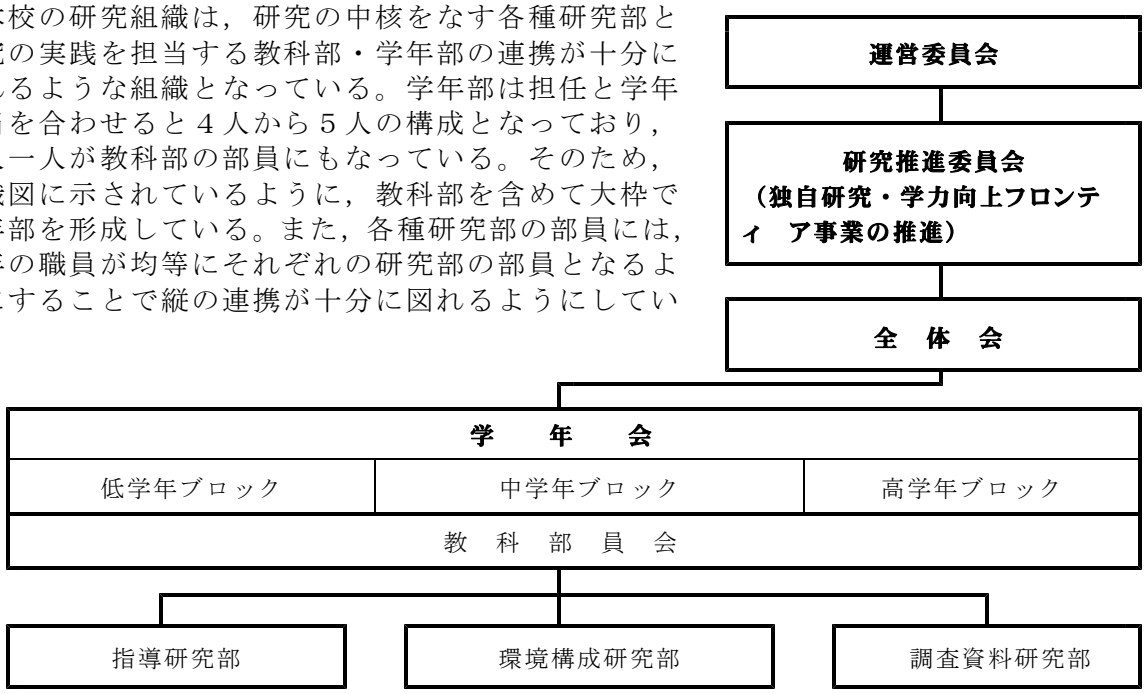
・個に応じた発展的・補充的な教材

・自作テスト（漢字テスト，ことばのテスト，算数単元達成テスト等）

平成16年度	○　テーマ ※平成15年度に同じ。 ○　仮説（仮） ※平成15年度の仮説(3)に重点をおく。 ○　研究の内容・方法 ※平成15年度の取り組みに修正を加えるとともに，評価と教材開発に重点をおいた取り組みを進める。

(3) 研究推進体制

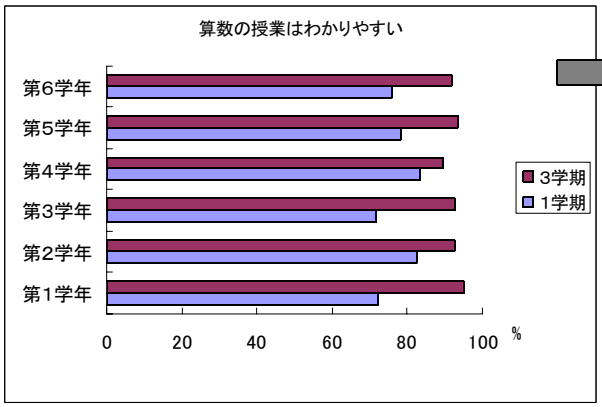
本校の研究組織は，研究の中核をなす各種研究部と研究の実践を担当する教科部・学年部の連携が十分に図れるような組織となっている。学年部は担任と学年担当を合わせると４人から５人の構成となっており，一人一人が教科部の部員にもなっている。そのため，組織図に示されているように，教科部を含めて大枠で学年部を形成している。また，各種研究部の部員には，学年の職員が均等にそれぞれの研究部の部員となるようにすることで縦の連携が十分に図れるようにしている。



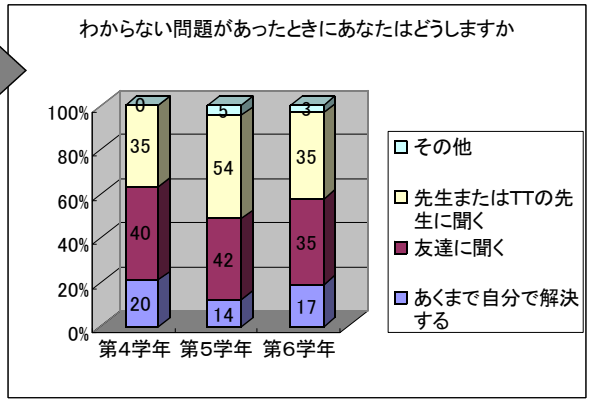
Ⅲ 平成１5年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

(1) 算数科　（ＴＴ・少人数指導・教科担任制の取り組みについて）



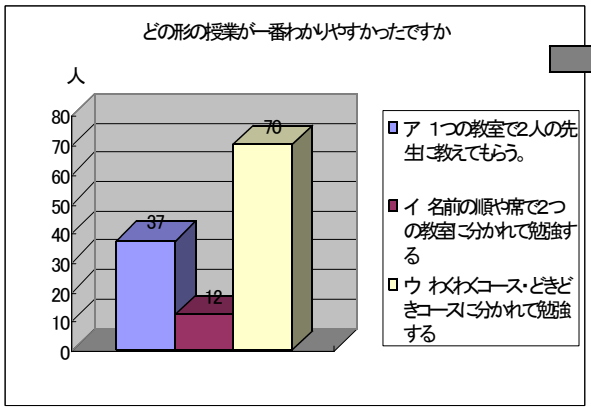
平成１４年度　１学期と３学期の比較（全児童対象）



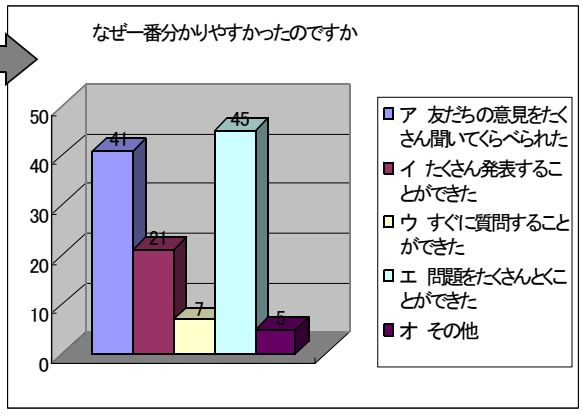
平成１５年度　１学期（第３学年児童対象）

平成１４年度からのＴＴ・少人数指導・教科担任制の取り組みが，児童にとって「わかりやすい授業」となっている。また，わからない問題をＴＴの先生にきいたりする，児童の自発的な学習行動が全体の約４割を占めている。

※少人数指導アンケート



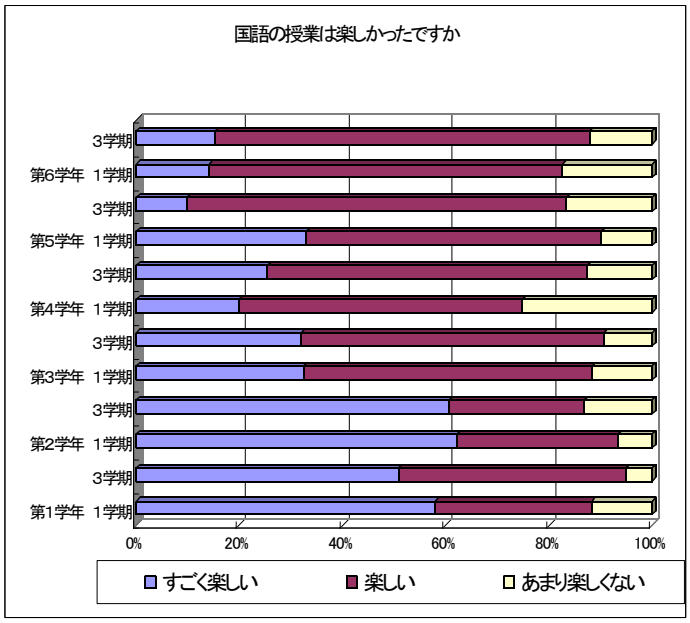
平成１５年度　１学期（第３学年児童対象）



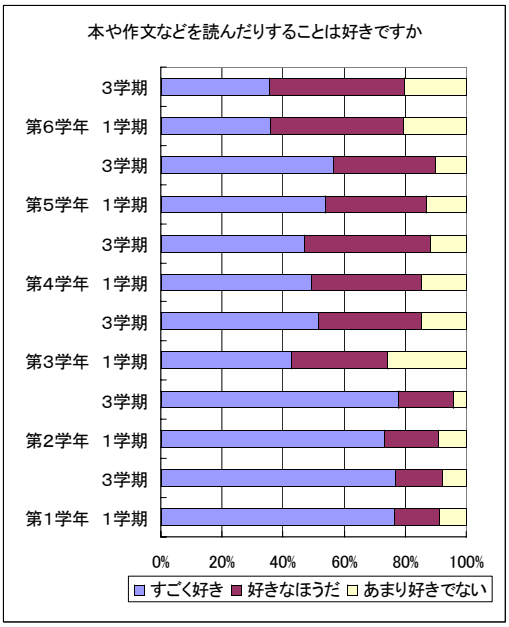
平成１４年度　３学期（全児童対象）

第３学年の少人数指導では，「わくわくコース・どきどきコース」に分かれて学習する習熟度別学習が，児童にとって一番わかる授業となっている。

(2) 国語科　（ＴＴ・少人数指導の取り組みについて）



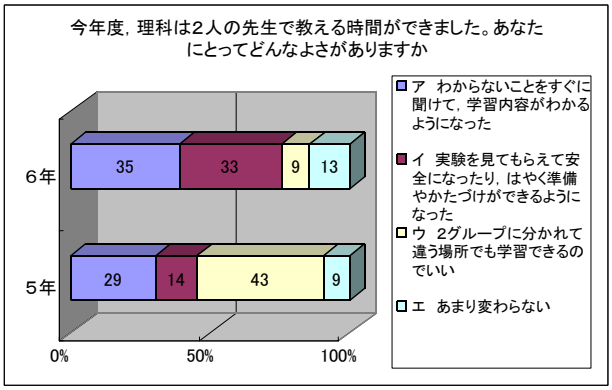
平成１４年度　１学期と３学期の比較（全児童対象）

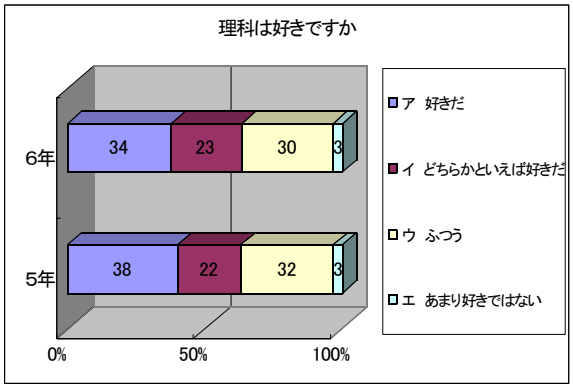


平成１４年度　１学期と３学期の比較（全児童対象）

平成１３年度から「楽しさの中で児童の能力を伸ばそう」を柱に取り組んできた。少しずつその成果がでてきたように思われる。読書などに関しても，全学年を平均すると８割強の児童が「好き」との解答を得た。

(3) 理科　（教科担任制・ＴＴの取り組みについて）

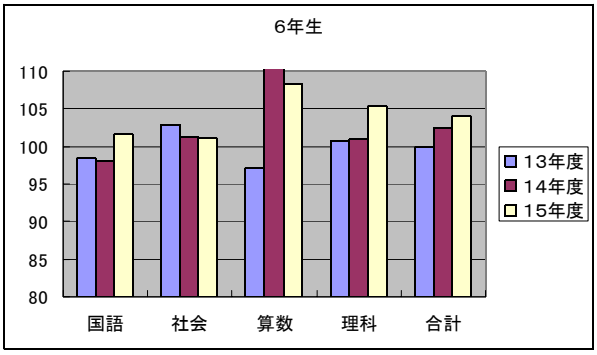


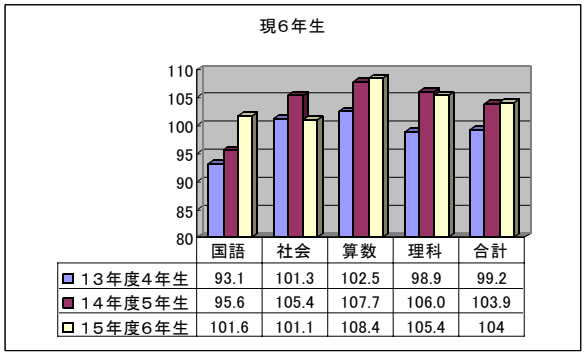


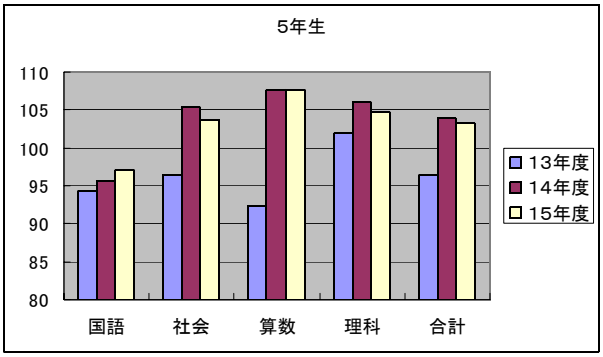
今年度からの教科担任制の取り組みが，学級担任とのＴＴ（週１～２回実施）で大き

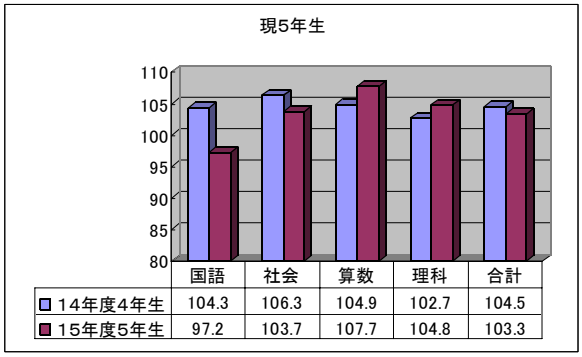
な成果を上げているといえる。特に，６学年ではいろいろな実験が充実してきたこと，５学年ではコース別学習に取り組めたことなどがあげられる。

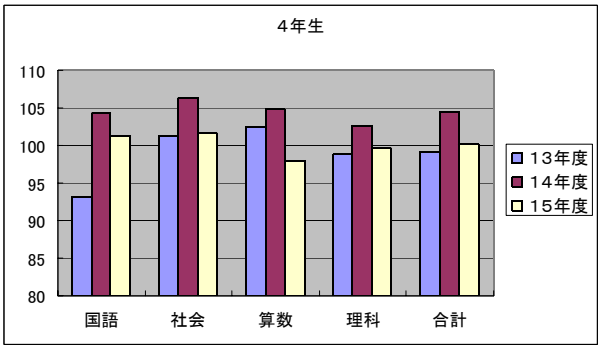
(4) 「学力診断のためのテスト」からみる児童の学力　※県平均を100とした場合の本校児童の値

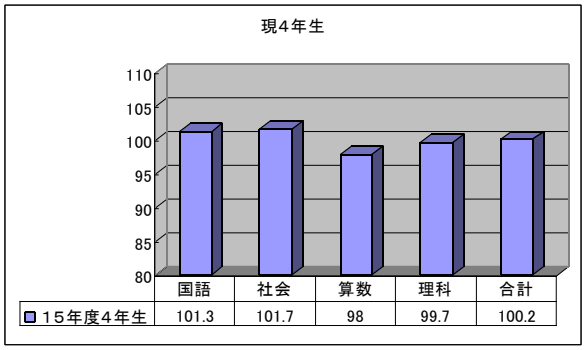








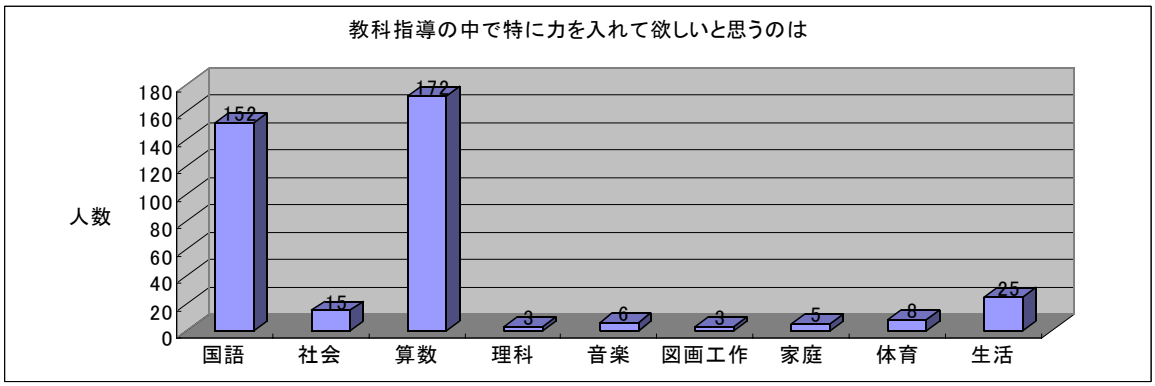


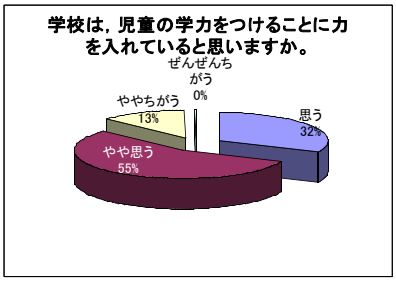


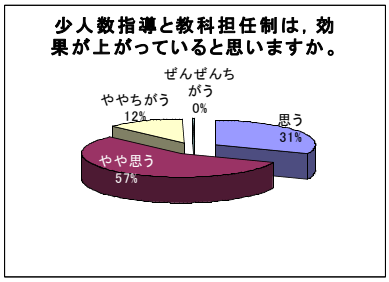
グラフ左側：各学年における年度別値　　**グラフ右側：各学年の追跡値**

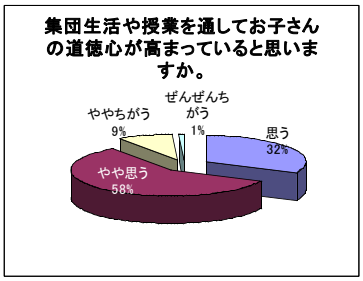
グラフ左側の「各学年における年度別値」からは，児童の学力の実態をつかむことができる。グラフ右側の「各学年の追跡値」からは学年を経るごとの児童の学力の伸びをみることができる。特に，現在の６年生に目を向けてみると，過去３年間のデータから年々力が付いてきていることが読みとれる。

(5) 保護者の学校評価　　（平成１４年度３学期に実施：回収率７１％）









保護者は教科指導において，国語及び算数に力を入れてほしいとの思いがある。本校の「『 確かな学力 』を身に付けた児童の育成 」に向けた様々な取り組みに対しても，保護者の多くは理解を示していることがわかる。

２．今後の課題

(1) 「確かな学力」の定着のために，授業検証をもとにした，指導方法の工夫・改善をより一層進める。

(2) 習熟度別学習やコース別学習をさらに充実させるための，個に応じた補充的・発展的な学習教材づくりを系統的・継続的に進める。

(3) 評価の在り方と評価を生かした授業づくりを研究する。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

１．児童の意識調査（毎学期実施）※研究の成果に示したグラフ参照

児童の学習意欲や取り組み状況，さらに学校生活の状況など，知・徳・体の面から調査を実施し，児童の実態把握に努めている。

２．各種テストの実施

児童の学習状況を客観的に把握するために実施している。

①算数達成テスト（算数科：毎単元終了時に実施：自作テスト）
②漢字力テスト（国語科：毎月実施：自作テスト）
③ことばのテスト（国語科：３学期に実施：自作テスト）
④「学力診断のためのテスト」（国語，算数，社会，理科：４月に実施）
⑤観点別学習テスト（国語，算数，社会，理科：３学期に実施）
⑥算数確認テスト（算数科：３学期に実施：市教委自作テスト）

３．個人カルテの活用（図５参照）

基礎的・基本的な内容のより一層の定着を図るため，算数科に於いて実施している。単元終了時に行う「算数達成テスト」の結果を基に，児童のつまずきを把握し，個別指導等を行っている。

４．教師の意識調査（年度末実施）

指導方法の工夫・改善，教師の意識改革を図るために実施している。

５．保護者の学校評価（年度末実施：研究の成果(5)のグラフ参照）

保護者の児童に対する思いや願い，本校の取り組みに対しての意識や考え方を理解・把握するために実施している。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○平成15年10月31日（金）　水海道市立水海道小学校において公開授業研究会を実施
　テーマ：「学びの機会を充実し，個に応じて一人一人の力を伸ばす指導の在り方」
　対　象：県内のフロンティアスクール
　　県西地区管内の小中学校，および本校保護者
○HPにおける成果の普及については平成15年度内に実施予定
○本校「研究紀要」（冊子，平成15年度版）において研究の取り組みとその成果を普及
　　対象：公開授業研究会参加者全員
○本市「研究紀要」（冊子，平成15年度版）において研究の取り組みとその成果を普及
　　対象：本市小中学校

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□15年度からの新規校　■14年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～12学級
□13～18学級　■19～24学級
□25学級

【指導体制】　■少人数指導　■ＴＴによる指導
■その他

【研究教科】　■国語　□社会　■算数　■理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■　有　□　無